

スポーツボランティア・リーダー養成研修会 テキスト

目次

はじめに	1
------	---

第1章 スポーツボランティア・リーダーとは

1	スポーツボランティア・リーダーに求められるもの	
1-1	スポーツボランティアの定義	2
1-2	スポーツボランティア・リーダーの心得	3
1-3	スポーツボランティア・リーダーの役割	4
1-4	チームとしてのスポーツボランティア	5
2	スポーツボランティア・リーダーとリーダーシップ	
2-1	リーダーシップとは	6
2-2	フォロワーシップとは	7
3	スポーツボランティアの楽しみ方	
3-1	ボランティアの満足度を上げるためには	8
3-2	スポーツボランティア・リーダーの意義・やりがい	10

第2章 スポーツボランティアに関する社会状況

4	スポーツボランティアの現状と課題	
4-1	スポーツボランティアの活動状況	12
4-2	スポーツボランティアの課題	15
4-3	スポーツ行政機構	16
4-4	スポーツ基本法	17
4-5	スポーツの推進に関する法律	18
4-6	スポーツ基本計画とスポーツボランティア	19
5	障害者スポーツにおけるスポーツボランティア	
5-1	障害者のスポーツ実施状況	20
5-2	障害者差別解消法	21
6	スポーツの価値を高める存在としてのボランティア活動	
6-1	求められるスポーツボランティアの力	22
6-2	多様化するスポーツボランティアの可能性	22

第3章 スポーツボランティア・リーダーに必要なスキル

7 コミュニケーションで意識すべきこと

7-1 コミュニケーションの目的	23
7-2 アイスブレイク	24
7-3 ハーディング効果	24
7-4 スポットライト	24
7-5 インフルエンサー	24

8 リスクマネジメントスキル

8-1 リスクとは	25
8-2 スポーツボランティアにおけるリスク	25
8-3 リスク回避・対応能力	26
8-4 備えておきたい対応方法	27
8-5 応急手当を身に付けておくことの大切さ	28
8-6 保険について	28
8-7 具体的なリスク軽減	29

第4章 日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)について

9 スポーツボランティア養成プログラムの概要

9-1 スポーツボランティア養成プログラム	31
9-2 更新講習	31
9-3 講師・指導者制度	31

～はじめに～

スポーツが盛んになるに従って、「スポーツをする人」や「スポーツを見る人」が増え、「スポーツをささえる人」であるスポーツボランティアが活躍する機会も増えている。その結果、スポーツボランティア活動をする人が増えることは、とても喜ばしいことであるが、それぞれ異なる参加動機や思いを持つボランティアが、スポーツボランティア活動を楽しむために、多くの場面でスポーツボランティア・リーダーの力が求められている。

恐らく皆さんが今まで参加したスポーツボランティア活動の現場でも、スポーツボランティア・リーダーの活躍によってボランティア仲間一体感が生まれ、「またスポーツボランティア活動に参加したい」と感じた人も多いのではないかと思う。

その様な経験をしたことがある人に、今度は自分がスポーツボランティア・リーダーとして、初めてスポーツボランティアを経験する参加者に対し、笑顔で「また参加したい」と思ってもらえるスポーツボランティア・リーダーになってもらうことが、このスポーツボランティア・リーダー養成研修のねらいである。

普段の社会生活でリーダーを担った経験がない人は、「自分はリーダーになれるだろうか」、もしくは「自分はリーダータイプではない」と不安を感じる人もいるかもしれない。ただ、スポーツボランティア・リーダーとは、ボランティア活動をする上で必要なひとつの「役割」に過ぎない。つまり、自分が持っている資質やタイプよりも、スポーツボランティア・リーダーに必要な知識や能力を身に付けることで、誰でもスポーツボランティア・リーダーになることができるのである。

とは言え、スポーツボランティアの現場に必要なスポーツボランティア・リーダーの役割は様々である。それぞれの現場で関わる関係者によって求められるスポーツボランティア・リーダーの役割は大きく変わってくるため、スポーツボランティア・リーダー養成研修を受講して身につけた知識を使い、より多くのスポーツボランティア活動に参加し、自らの経験を基に、それぞれが描く理想のスポーツボランティア・リーダー像を目指してほしい。

スポーツボランティア・リーダーとは

1 スポーツボランティア・リーダーに求められるもの

1-1 スポーツボランティアの定義

スポーツボランティア研修テキストに記載されている通り、ボランティアとは、自主性、及び公益性、無償性の3原則に基づき、かつ先駆性、継続性がある社会的活動のこと、あるいは活動する人と定義されている。

スポーツ以外のボランティアとして、災害ボランティアや教育ボランティアといった活動が社会的に認知されているが、ボランティアの定義に大きな差はなく、同様の原則に基づいていることが多い。

一方、スポーツとは、一般的に汗をかく運動等を想起させるが、広義としてとらえた場合、チェスやキャンプの様に余暇を楽しむ活動も含むとされている。

近年では、eスポーツというバーチャル（仮想現実空間）形式のゲームが盛んになっており、テレビモニターに向かい座った状態でコントローラーを操作する活動が、「スポーツ」に該当するのか議論が分かれることがあるが、「余暇を楽しむ」という意味ではスポーツに含まれ、またゲームを楽しむためにトレーニングをしたり、集中力を高めたりする行為は、他の競技系スポーツと同様であるため、今後はスポーツボランティアの対象となる可能性を秘めている。

つまり、スポーツボランティアとは、スポーツ以外のボランティア活動と同様に、普遍性のある原則に基づいた活動として、運動や競技を含めた多くの余暇を対象とする社会的な活動のことである。

スポーツ以外を対象とするボランティア活動が今後、増えてきた場合でも、ボランティア活動の原則は普遍的であると考えられるが、スポーツボランティアの対象となる「スポーツ」は、オリンピック・パラリンピックに新しい競技が加わるのと同様に、今までなかった活動がスポーツボランティアの対象として、今後増えてくることが予想される。

スポーツとして新しい競技や種目が増え、そのスポーツを楽しむ人が増えていくに従い、そのスポーツをささえる人が必要になってくる。これからも、様々なスポーツを楽しむことができる寛容な社会を作っていくためにも、スポーツボランティアは非常に重要な役割を担っていると同時に、スポーツボランティアを楽しむ機会を創出していくことが、スポーツボランティア活動の醍醐味でもある。

1-2 スポーツボランティア・リーダーの心得

スポーツボランティア活動には、スポーツボランティア・リーダーの存在が欠かせない。スポーツイベントやスポーツ組織の運営等を成功させ、スポーツボランティアに参加する人が楽しむためには、スポーツボランティア・リーダーの役割が非常に重要である。

スポーツボランティア活動以外の企業活動や社会活動におけるリーダーの役割は、目標を定め、優先順位を決め、組織を統率する者とされることが多いが、スポーツボランティア活動においては、その役割は異なる場合が多い。

一般的に企業活動や社会活動においては、リーダーには相応の職位や権限があり、ある程度、強制力や執行力を伴うことが多いが、スポーツボランティア活動におけるリーダーには、ボランティアの原則のひとつである無償性に基づき、業務委託等の契約に縛られているわけではないことから、企業活動や社会活動の様な権限や強制力を伴う場合は少ない。スポーツボランティア活動におけるリーダーは、スポーツボランティア活動への参加者に対して、作業指示や協力依頼をすることはあっても、強制的に作業を行わせるような権限を持ち合わせているわけではなく、スポーツボランティア・リーダーとは、スポーツボランティア活動を行うためのひとつの役割に過ぎない。

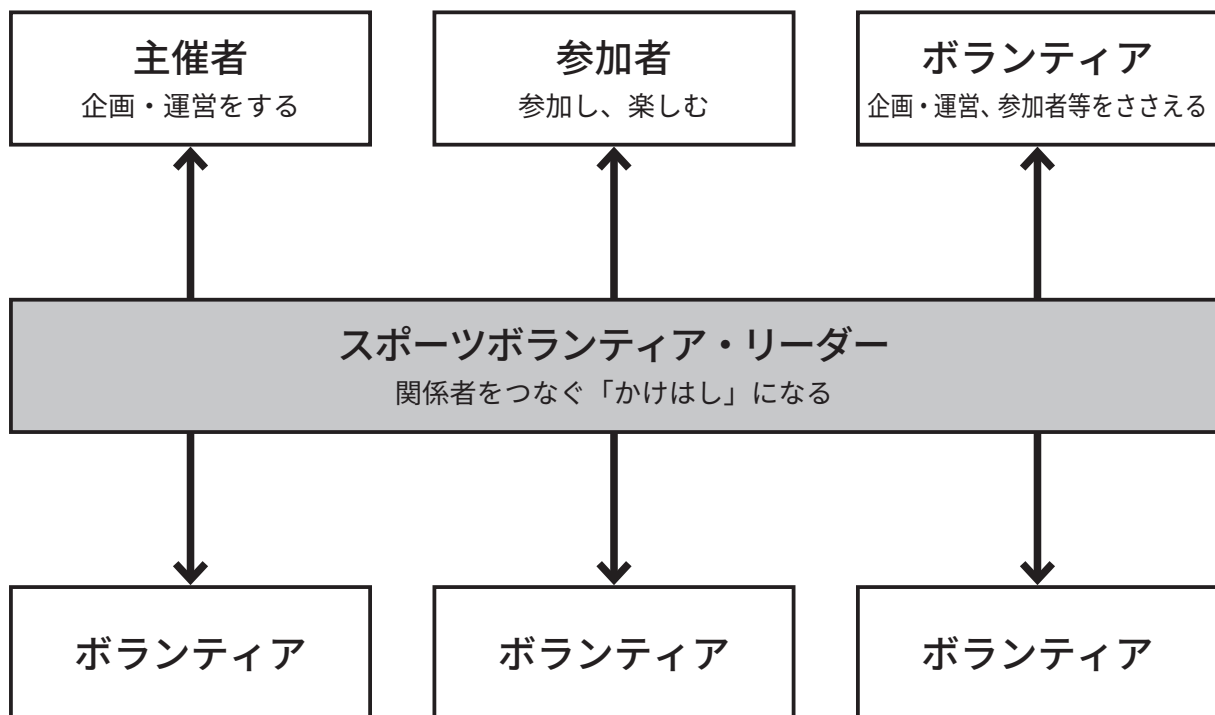
また、ボランティア活動は複数の参加者によって行われるものであり、リーダーの力だけで実現できるものではない。そして、大会やイベントを成功に導くのは個人の力ではなく、集団の協力が必要であることを忘れてはならない。スポーツボランティア・リーダーは自身の思想や感情にとらわれるのではなく、チームやイベントへの貢献を第一に考え、判断・行動することが求められる。



1-3 スポーツボランティア・リーダーの役割

スポーツイベントにおけるスポーツボランティア・リーダーは、マラソン大会などの単発的な企画や、地域のスポーツクラブやスポーツ団体における定期的なスポーツ活動において、それらがよりよく運営されるように主体的に考え、行動する役割を担っている。具体的には、イベントや企画、活動の成り立ちや主旨をよく理解し、メンバーへ説明することや、メンバーの能力を把握して的確な指示を出し、「主催者とボランティア」や「参加者とボランティア」、あるいは「ボランティア同士」など様々な関係者をつなぐ「かけはし」になることが、スポーツボランティア・リーダーの主な役割である。

スポーツイベント・活動における各者の立場と役割



自身の役割をまっとうするために、スポーツボランティア・リーダーは、次のような準備に力を入れる必要がある。

- ① イベント・活動の開催目的や主催者の意図を知っておく
- ② 競技の基本的なルールを確認しておく
- ③ 予想されるリスクに備え、知識を持っておく

また、ボランティア活動当日は次のような心がけが重要となる。

- ① 事前準備に力を入れる
- ② 挨拶は大きな声で行う
- ③ メンバーのモチベーションが上がる環境づくりを心がける
- ④ メンバー一人ひとりへ気を配る
- ⑤ 自らが楽しむ

1-4 チームとしてのスポーツボランティア

チームとは、「共通の目的や達成すべき目標、そのためのアプローチを共有した少数の集合体」であるとされている。つまり、「仲間が思いをひとつにして同じゴールに向かって進み、機能する」のがチームだといえる。

日本社会では、協調性が重視され、個より集団が尊重されることが多い。しかし、それは個の考えよりも多数の意見を重視するものであり、多数の意見と異なる者は排除されるといった集団文化である。しかしチームは単なる人の集まりや集団ではない。チームビルディングの考え方では、まず個が尊重され、多様な個を組み合わせた集団をチームとして機能させることに重点がおかれる。

現在、スポーツイベントや競技大会において、スポーツボランティアは必要不可欠な存在であるが、スポーツボランティアが一人ひとりで行動してもイベントは機能しないどころか、かえって運営の妨げになることさえある。しかしまた、個が失われた集団は、単なる人の集まりでしかない。

スポーツボランティアが目指すチームは、単なる集団ではなく、個々が尊重された上で同じゴールをめざす人たちの集まりである。そして、単なる「集団」ではなく「チーム」として機能した時、スポーツボランティアの力は無限に発揮される。



2 スポーツボランティア・リーダーとリーダーシップ

2-1 リーダーシップとは

スポーツボランティア活動においては、スポーツボランティア・リーダーがリーダーシップを発揮するだけでなく、すべてのメンバーもリーダーシップを発揮することが求められる。一般的に「リーダーシップ」といえば、多くの場合、組織のトップ等、限られた人が持つべきものだという意識が強い。時には「船頭多くして船山に登る」ということわざがあるように、複数のリーダーがいると弊害が生じると捉えられることもあるが、より多くのメンバーがリーダーシップを発揮する組織ほど、高い成果が出やすいと考えられている。

リーダーシップとは、カリスマ性や資質等のように、特定の人間が保有する特別な才能ではなく、組織や事業の使命を明確にし、目標に対して責任を持ち、信頼を築きながら行動し模範を示す「能力」のことである。こうしたリーダーシップを発揮することで、誰でもスポーツボランティア・リーダーになれるのである。

役割や権限が異なっても、一人ひとりが、自分は何をするためにそこにいるのか、そのために何をしなくてはならないのかを考えることが、スポーツボランティア活動の大きな成果を生むことにつながる。ボランティアの語源が「志願兵」であるように、リーダーシップもまた、自ら志し、能動的に行動する、といったボランティアの本質と同様のものである。



2-2 フォロワーシップとは

フォロワーシップとは、フォロワー（メンバー）が集団の目的達成に向けてリーダーを補助していくことをいう。フォロワーシップの提唱者であるアメリカ・カーネギーメロン大学のロバート・ケリー教授の調査によると、組織が出す結果に対して「リーダー」がおよぼす影響力は1～2割だが、「フォロワー」が及ぼす影響力は8～9割だという。組織改革を始めるのはリーダーだが、完遂させるのはフォロワーである。

このことから、リーダーシップはスポーツボランテア・リーダーに欠かせないスキルであるとともに、チームにはフォロワーシップも欠かせない。チームとよい関係を築き、メンバーにフォロワーシップを発揮させる機会を作り出すことが、よいスポーツボランテア・リーダーとなるためのポイントである。

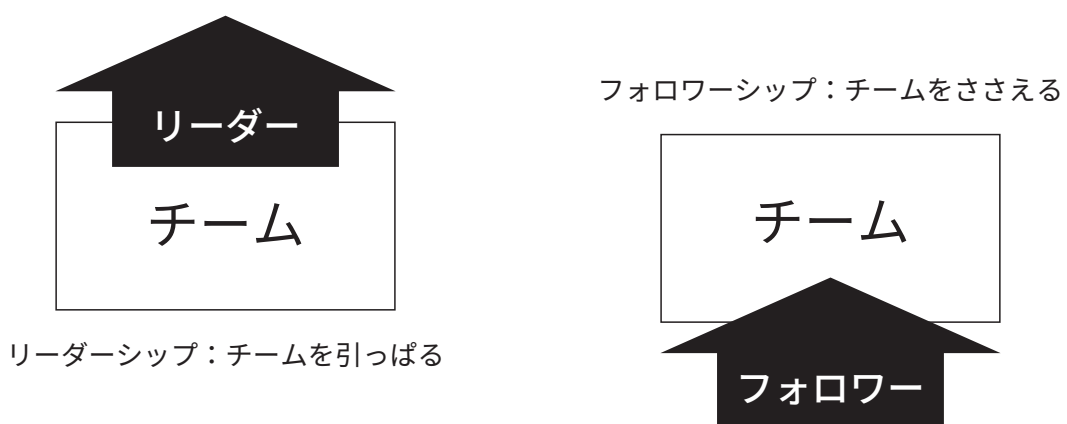
フォロワーシップが発揮された場合の、チームへの効果

- ①目的・方針を共有して実行に移すことができる
- ②リーダーの判断や決断のミス、抜けや漏れを防ぐことができる
- ③現場の情報をボトムアップすることができる
- ④チームとしての一体感を高めることができる
- ⑤提案・提言する雰囲気をつくることができる

フォロワーシップを発揮した場合の、個人的効果

- ①指示待ち的な姿勢から、自発的な行動に変わる
- ②リーダーの立場で考えることにより、リーダーの訓練になる
- ③一匹狼的な動きが、他メンバーと協働する動きに変わる

●リーダーシップとフォロワーシップのイメージ



3 スポーツボランティアの楽しみ方

3-1 ボランティアの満足度を上げるためには

スポーツボランティアに参加する人々の満足度を上げ、継続的に参加してもらうためにはどのような工夫が必要か、またボランティアの存在価値を高めるには何が大切か、イベントの主催者だけではなく、スポーツボランティア・リーダーとしても考える必要がある。

イギリスの「SPORTS RECREATION ALLIANCE」がスポーツボランティアに関して調査を行った結果、スポーツボランティア組織やイベント主催者が意識すべき6つのポイントがあることがわかった。それぞれの頭文字をとって「GIVERS」(ギバーズ)と呼んでいる。

①Growth 成長

ボランティア活動を通じて、自身の成長につながったことを具体的に感じさせることが大切である。例えば、イベント運営の知識やトラブルの解決方法等を積極的にメンバーに共有することで、イベント運営が効率的になるだけでなく、メンバーにとっても、自身の成長を体感してもらうことが重要である。

②Impact 影響

ボランティア活動が、誰かの役に立ったり、社会に対して貢献したと感じさせることが重要である。例えば、スポーツイベントに参加した選手が好記録を出せたのは、ボランティアが、その環境を作り出した運営側の一員だったということを実感できれば、メンバーの満足感につながる。

③Voice 伝え方

メンバーに伝えるメッセージは、可能な限りポジティブにする必要がある。例えば、活動中に失敗したり、知識不足が露呈した場合でも、批判的に伝えるのではなく、どうすれば再発を防ぐことができるか、あるいは他のメンバーのサポートを促して一緒に改善できることを伝えることにより、より一体感を生み出すことができる。

④ Experience 経験

ボランティア活動を、有意義な経験として感じさせることが重要である。ボランティア参加者は積極性のあるタイプが多いが、活動中は一定の役割が恒常的に与えられるとは限らないため、手持ち無沙汰になってしまう場合もある。逆に非常に忙しく、疲弊してしまうようなこともある。従って、ボランティア活動が、ノルマに縛られた仕事とは異なるものであることを伝えること、また活動中の隙間時間を含めて楽しむことで、より有意義な時間になるような工夫が必要である。

⑤ Recognition 感謝

メンバーに伝える感謝の言葉は、非常に大切である。単に感謝の意を伝えるのではなく、メンバーが費やした時間の長さ、工夫などをより具体的に伝えることで、感謝の重みが違ってくる。また感謝を伝えるタイミングや方法も重要である。例えば、休憩中に個別にかけると感謝の言葉や、活動終了時に多くの関係者の前で伝える感謝の言葉など、伝え方によっては、メンバーにとって、かけがえのない言葉になることを意識する必要がある。

⑥ Social 社会的価値

ボランティア活動を通じ、社会の一員として活動していることを実感させることが重要である。ボランティア活動に参加しなければめぐり合わなかった人との出会いや、友人を作るきっかけとすること等がそれに該当する。また、より多くの人とボランティア活動の成果を共有することで、ボランティア活動の意義や、社会構成員としての自分の存在感を感じる事が大切である。

GIVERS (ギバーズ)

Growth

ボランティア活動を通じて、自身の成長につながったことを具体的に感じさせる

Impact

ボランティア活動が、誰かの役に立ったり、社会に対して貢献したと感じさせる

Voice

メンバーに伝えるメッセージは、可能な限りポジティブにする必要がある

Experience

ボランティア活動を、有意義な経験として感じさせる

Recognition

単に感謝の意を伝えるのではなく、メンバーが費やした時間の長さ、工夫などをより具体的に伝える

Social

ボランティア活動を通じ、社会の一員として活動していることを実感させる

3-2 スポーツボランティア・リーダーの意義・やりがい

ボランティア活動の満足度にGIVERSの要素が深く関わっていることを踏まえると、スポーツボランティア・リーダーとしての意義・やりがいが見えてくる。メンバーがボランティア活動に満足し、笑顔で「また次のボランティア活動に参加したい」と感じてもらえることは、スポーツボランティア・リーダーにとっての大きな意義ではあるが、スポーツボランティア・リーダー自身にとっても、ボランティア活動に満足感を感じ取ることが、大きなやりがいにつながる。一般のメンバーでは得られない、スポーツボランティア・リーダーならではの貴重な経験は、スポーツボランティアの醍醐味でもある。

①Growth 成長

スポーツボランティア・リーダーの立場でメンバーに接したり、観客や主催者とのかけはしになることで、スポーツボランティア活動以外にも発揮できるリーダーシップを養うことができる。

②Impact 影響

スポーツボランティア・リーダーは他のボランティアメンバーに比べて、より幅広い役割を担い、より多くの関係者と接することが求められるため、イベントの成功に対する影響力が大きい。

③Voice 伝え方

スポーツボランティア・リーダーが発するメッセージが、多くのメンバーを励まし、たくさんの方が動いてくれることを実感することで、言葉の重みや心に響く伝え方を感じることができる。



④ Experience 経験

メンバーに比べ、スポーツボランティア・リーダーに求められる労力は大きく、時にはメンバーからの苦情を受けたりすることもある。ただし、机上では決して得られないボランティア活動現場ならではの貴重な経験を積むことができ、スポーツボランティア・リーダーを全うした後に味わえる感動は、メンバーとは比べ物にならないくらい大きなものであることは間違いない。

⑤ Recognition 感謝

メンバーとして得られる感謝よりも、非常に多くの関係者から感謝の言葉を得られる機会が、スポーツボランティア・リーダーにはある。ボランティア活動が終わった後、メンバー一人ひとりからかけられる感謝の言葉ほど、スポーツボランティア・リーダーを奮い立たせるものはない。

⑥ Social 社会的価値

ボランティア活動が社会に与える影響は、スポーツボランティア・リーダーの振る舞いによって変わってくる。ボランティア参加者が増え、日本中にボランティア仲間が増え、スポーツボランティア以外の場でも助け合える社会が実現できれば、スポーツボランティア・リーダーの価値は無限に広がる。

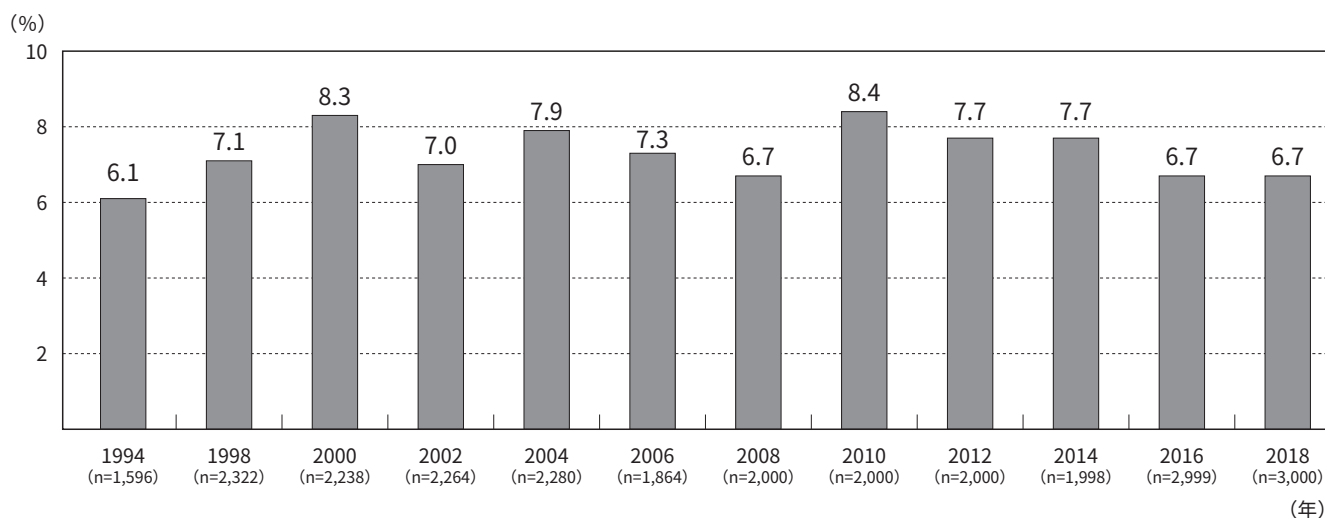


スポーツボランティアに関する社会状況

4 スポーツボランティアの現状と課題

4-1 スポーツボランティアの活動状況

過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者は成人全体の6.7%で、2016年調査と同ポイントである。1994年からの経年で見ると、2010年で最高値となったが、過去20年間ほぼ横ばいの状況である。

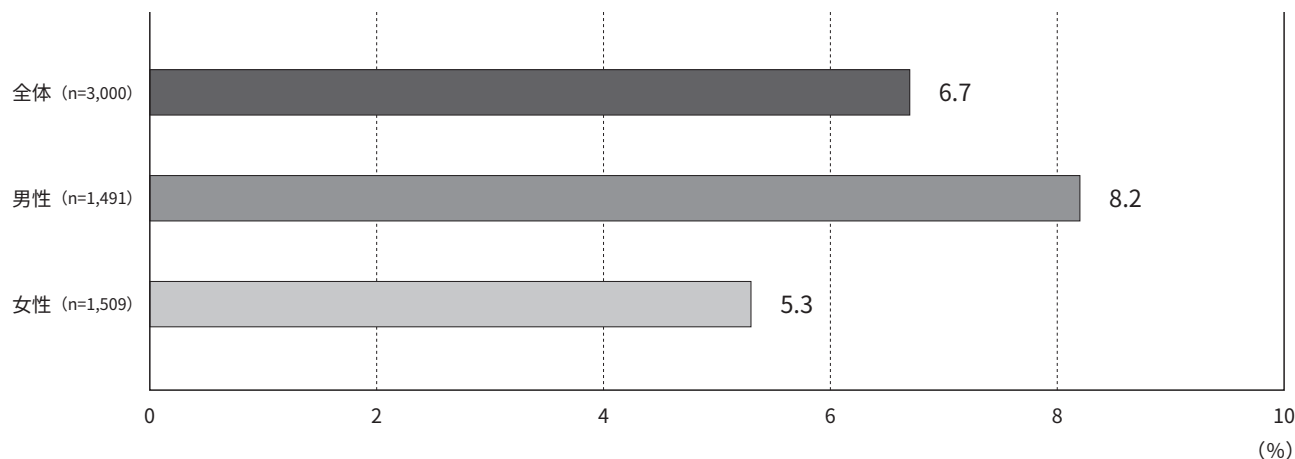


【図1】スポーツボランティア実施率の年次推移

注) 2014年までは20歳以上、2016年以降は18歳以上を調査対象としている。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

スポーツボランティア実施率を性別で見ると、下のグラフの通りである。男性が8.2%、女性が5.3%と、男性の方が女性よりも実施率が高かった。



【図2】スポーツボランティア実施率（全体・性別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

下には、年代別、運動・スポーツ実施レベル別のスポーツボランティア実施率を示した。年代別に見ると、18・19歳が9.9%と最も高く、20歳代と50歳代が7.3%と続く。60歳代のスポーツボランティア実施率は、最も低い5.3%であった。

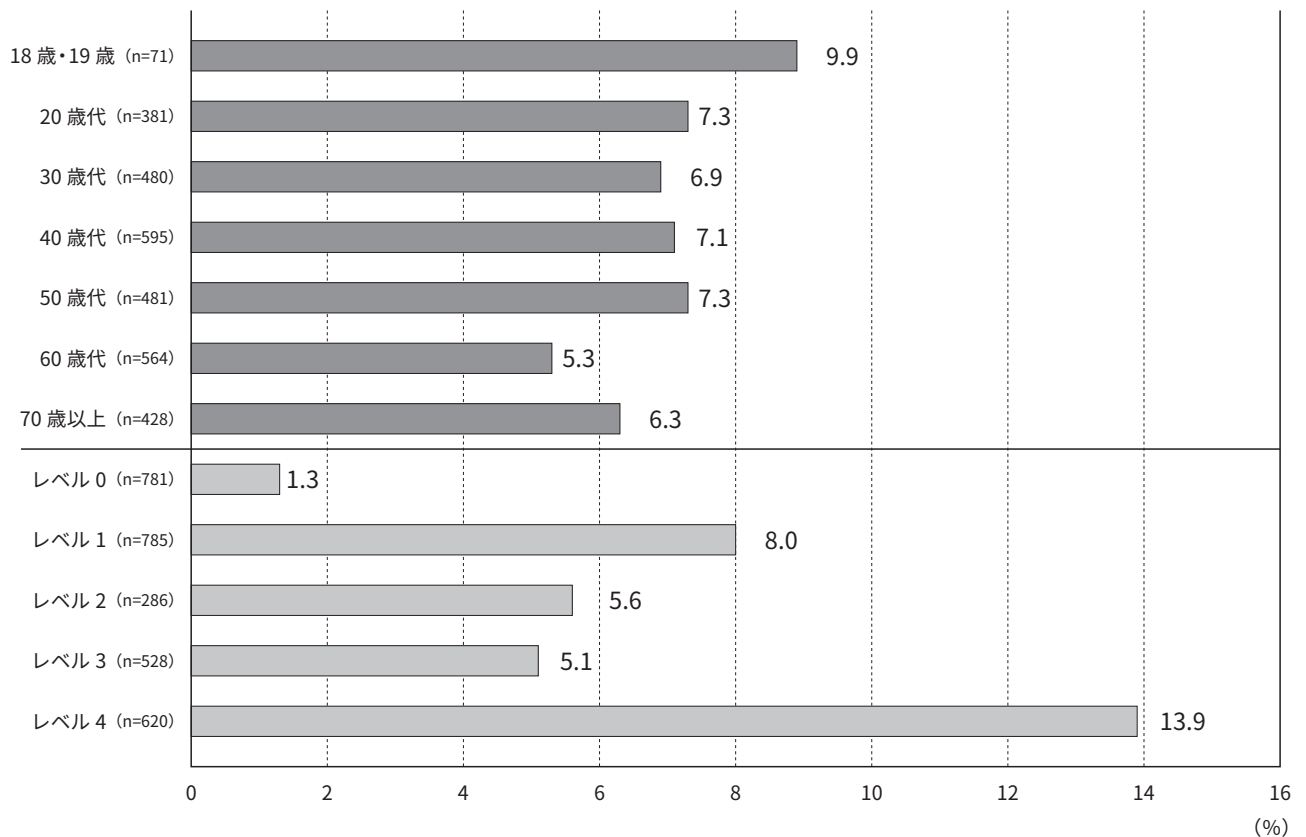
笹川スポーツ財団が発行する『スポーツライフ・データ2018』では、「実施頻度」「実施時間」「運動強度」をもとに、運動・スポーツ実施状況を量的・質的観点から捉えた「運動・スポーツ実施レベル」という指標を設けている。

【表1】 運動・スポーツ実施レベル

実施レベル	基準
レベル0	過去1年間にまったく運動・スポーツを実施しなかった（年0回）
レベル1	年1回以上、週2回未満（年1～103回）
レベル2	週2回以上（年104回以上）
レベル3	週2回以上（年104回以上）、1回30分以上
レベル4（アクティブ・スポーツ人口）	週2回以上（年104回以上）、1回30分以上、運動強度「ややきつい」以上

運動・スポーツ実施レベル（『スポーツライフ・データ2018』）

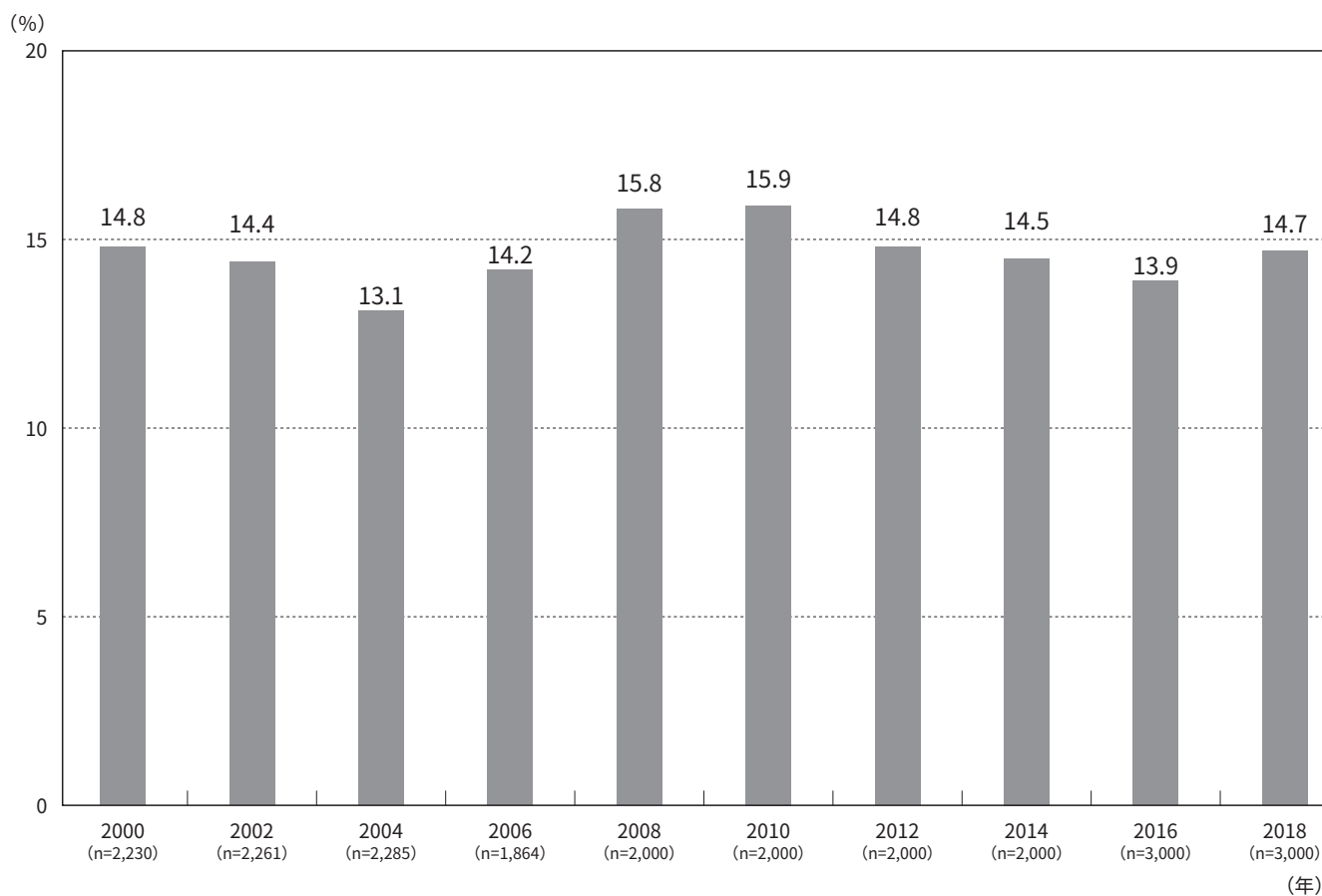
この指標別に見ると、「レベル4」は13.9%と最も高く、「レベル1」8.0%、「レベル2」5.6%、「レベル3」5.1%と続く。一方、過去1年間に運動・スポーツをまったく行わなかった「レベル0」は1.3%であり、運動・スポーツ実施者と比較してスポーツボランティア実施率は極端に低いことがわかる。



【図3】 スポーツボランティア実施率（年代別・レベル別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

今後のスポーツボランティアの実施希望をたずねたところ、「行いたい」「ぜひ行いたい」＋「できれば行いたい」と回答した者の割合（実施希望率）は、14.7%だった。実施率6.7%に対して2倍以上の潜在的なボランティア実施者がいることがわかる。



【図4】スポーツボランティア実施希望率の年次推移

注) 2014年までは20歳以上、2016年以降は18歳以上を調査対象としている。

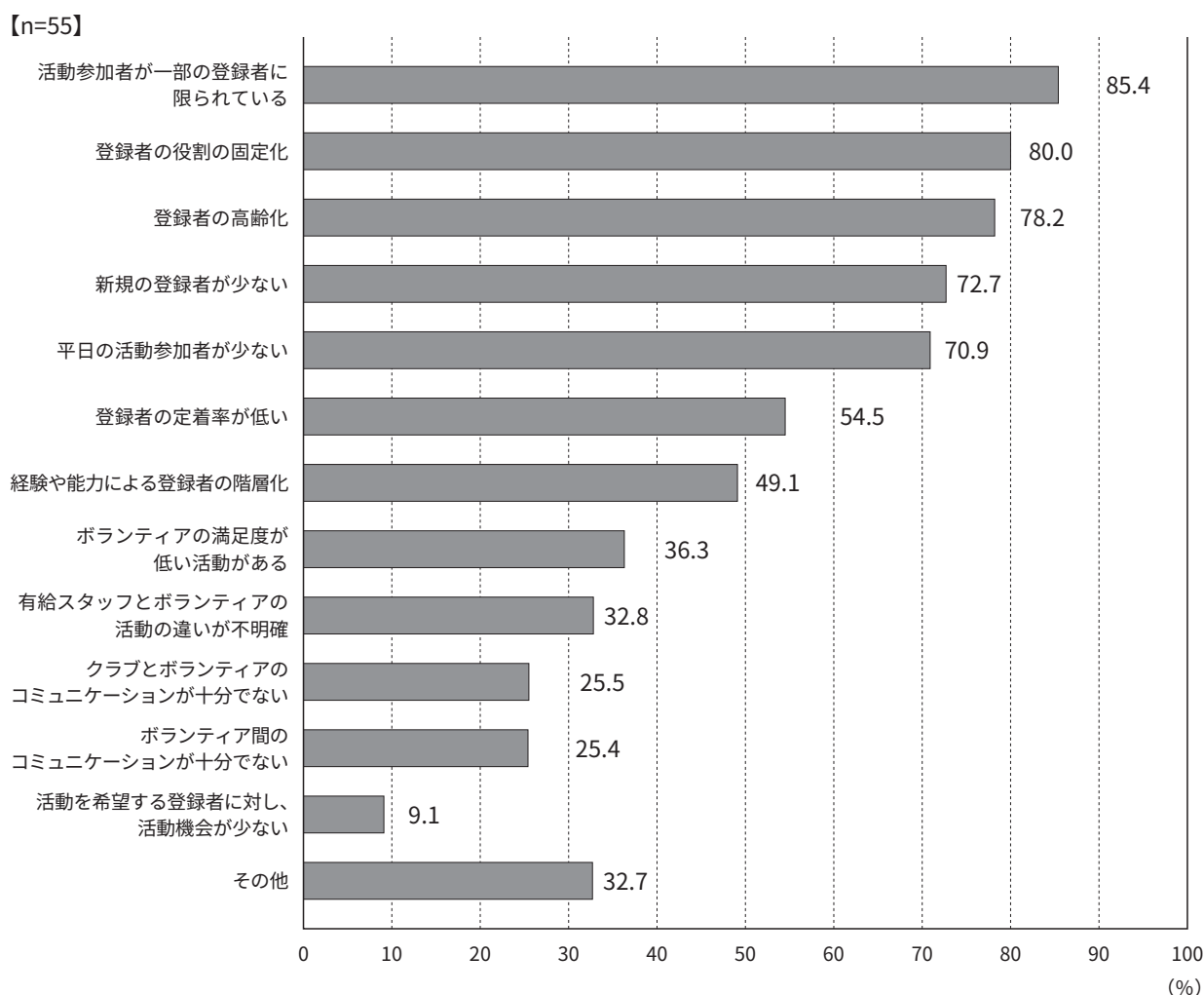
資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

4-2 スポーツボランティアの課題

スポーツボランティアが直面している課題のひとつとして、「人材（メンバー）の固定化」が挙げられる。前述したスポーツボランティアの実施率が示す通り、2010年以降のスポーツボランティア実施率は上昇しておらず、新しくスポーツボランティア活動を行う人が少ないことにより、スポーツボランティアを活用する団体では「人材の固定化」という課題を招いている。

一例として、笹川スポーツ財団が2019年に実施した「Jリーグクラブのボランティアに関する調査」では、ボランティアの活動上の課題に最も挙げられたのが「活動参加者が一部の登録者に限られている」ことであった。人材が固定化されることで、一部のメンバーに活動の負担が集中してしまう恐れがある。

【図5】 Jリーグクラブのボランティア活動上の課題



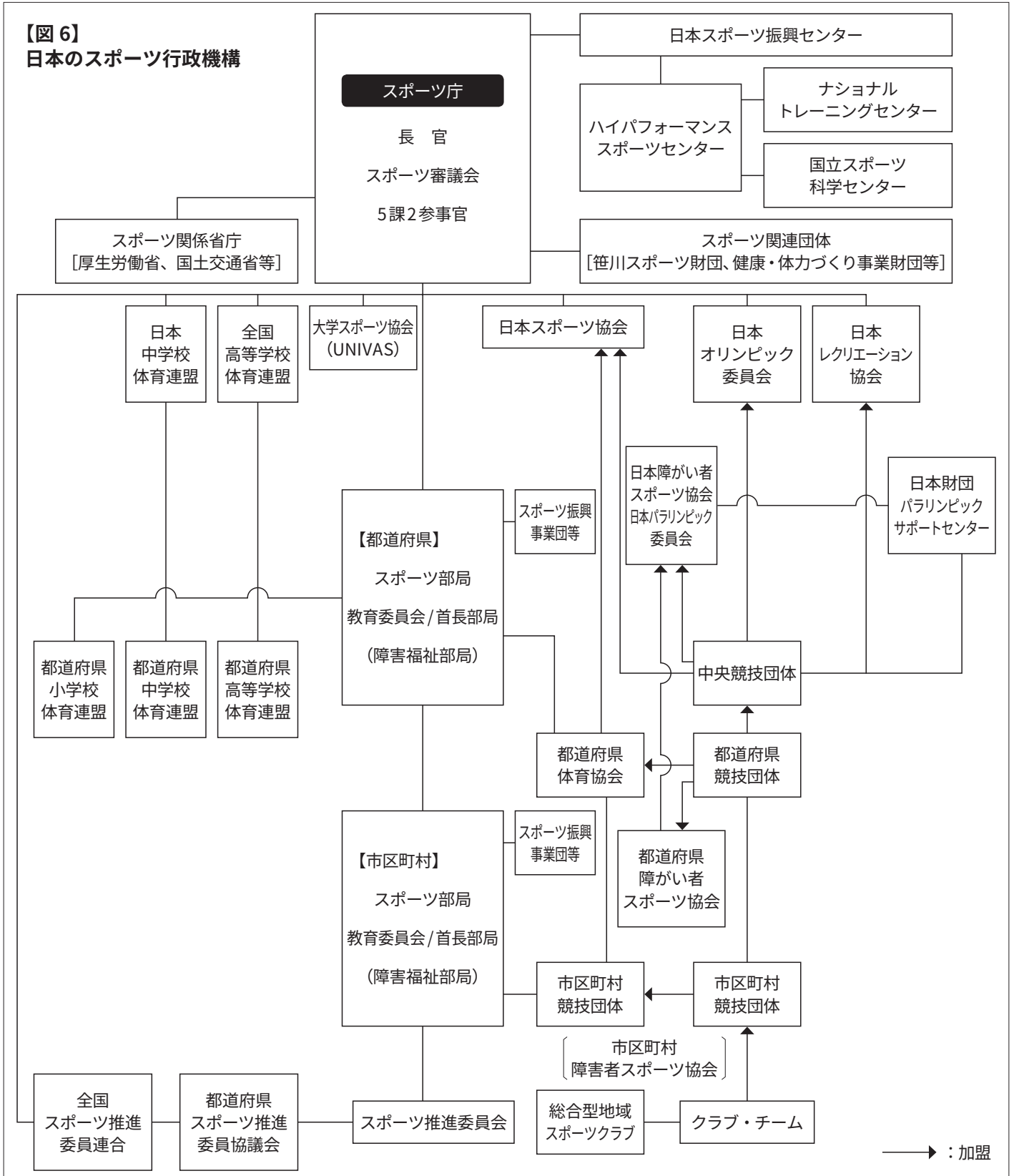
資料：「Jリーグクラブのボランティアに関する調査」

人材が固定化される要因のひとつに、特定の中心メンバーや活動の経験者が強いコミュニティを作ってしまう、初めて参加する人が疎外感を感じてしまうことがある。仲間意識が、新たに活動しようとする人を阻害する要因とならないように、スポーツボランティア・リーダーが新しく参加する人の目線に合わせ、積極的に声かけや気配りをする必要がある。

スポーツボランティア活動を将来にわたって継続・発展させるためには、ボランティア団体だけでなく、スポーツボランティア・リーダーも、誰もが参加しやすく、活動にやりがいをと楽しみを感じられる環境を創出する努力を続けなければならない。

4-3 スポーツ行政機構

戦後のわが国のスポーツは、教育行政の一環で、文部科学省（旧・文部省）と地方自治体の教育委員会を中心に推進されてきた。2015年10月にはスポーツ庁が発足。スポーツ庁は、文部科学省スポーツ・青少年局の組織を拡充する形態で、同省の外局として設置され、長官、次長、審議官、スポーツ総括官が幹部として存在する。



資料：「スポーツ白書」2020

日本体育協会「スポーツ指導者必携」(2005) を改編しSSF 作成

4-4 スポーツ基本法

2010年8月に文部科学省は、「スポーツ振興法」(1961年制定)に替わる新たなスポーツに関する基本的な法律の制定を視野に、今後のスポーツ政策の基本的な方向性を示した「スポーツ立国戦略」を発表。新たなスポーツ文化の確立を目指し、「人(する人、観る人、支える(育てる)人の重視)」「連携・協働の推進」を基本的な考え方として、おおむね10年間で実施すべき5つの重点戦略、政策目標、重点的に実施すべき施策や体制整備のありかたなどを示した。

そのスポーツ立国を実現すべく、2011年の第177回国会(常会)において「スポーツ基本法」が成立した。このスポーツ基本法は、スポーツ振興法を50年ぶりに全部改正し、スポーツに関する基本理念および施策の基本となる事項を定め、国および地方自治体の責務やスポーツ団体の努力等を明らかにした。スポーツ基本法の特徴的な条項は次の通りである。

・第2条の基本理念では、5項に「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と障害者スポーツの推進を規定している。

・第5条では、スポーツ団体にも「スポーツを行う者の権利利益の保護」「運営の透明性の確保」「スポーツに関する紛争について、迅速かつ適正な解決に努める」ことを求めている。

・第9条では、文部科学大臣に「スポーツ基本計画」(後述)の策定を義務づけ、第10条では、地方自治体がスポーツ基本計画を参酌し、地方の実情に即した地方スポーツ推進計画を策定するよう求めている。

・第18条では、スポーツ産業が果たす役割についても注目し、スポーツ産業の事業者との連携・協力についても触れている。

2018年6月、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に、スポーツを通じた社会変革に向け世界各国と協調していくため、世界的に広く用いられているスポーツの語を基本的に用いるべく、スポーツ基本法の一部が改正された。これにより、第26条および第33条の「国民体育大会」が「国民スポーツ大会」へ変更される等の改正が行われた。

4-5 スポーツの推進に関する法律

わが国にはスポーツ基本法以外にも、直接または間接的にスポーツの推進に関わる法律がある。下表には主なスポーツ推進関連法を示した。

【表 2】 主なスポーツ推進関連法

法律名	所管省庁
学校教育法	文部科学省
社会教育法	
屋外広告物法	国土交通省
建築基準法	
道路法	
都市計画法	
都市公園法	
自転車活用推進法	
興行場法	厚生労働省
食品衛生法	
身体障害者福祉法	
消防法	総務省
地方自治法	
自然公園法	環境省
国有林野の管理経営に関する法律	林野庁
国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律	内閣府
特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律	

スポーツ庁「スポーツ施設に関する調査研究」(2016)、
各省庁資料 (2019)より作成

資料：「スポーツ白書」2020

2018年6月に公布された「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律」では、「体育の日」の名称が2020年より「スポーツの日」に変更となり、「スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を培うとともに、健康で活力ある社会の実現を願う」とこととされた。

4-6 スポーツ基本計画とスポーツボランティア

2012年3月に策定された「スポーツ基本計画」は、スポーツ基本法の理念を具体化し、今後のわが国のスポーツ施策の具体的な方向性を示すものとして、国、地方公共団体およびスポーツ団体等の関係者が一体となって施策を推進していくための重要な指針として位置づけられている。スポーツ基本計画の中で、「スポーツボランティア」の文言は14ヵ所で使用されている。特に「第3章 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」における「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進」で、「今後の具体的施策展開」として以下のことが明記されている。

(スポーツボランティア活動の普及促進)

- 国は、地方公共団体、大学・研究機関、スポーツ団体、民間事業者等と連携を図りつつ、スポーツボランティア活動に関する事例の紹介等の普及・啓発活動を通して、スポーツボランティア活動に対する国民の関心を高める。
- 地方公共団体においては、スポーツボランティアとして大きな貢献がある者を、例えば「スポーツボランティアマスター（仮称）」として認定しその功績を称えること等により、スポーツボランティア活動を奨励することが期待される。
- 地方公共団体やスポーツ団体等においては、地域住民が、日常的に総合型クラブをはじめとした地域スポーツクラブやスポーツ団体等の運営に参画できたり、校区運動会や地域スポーツ大会等のスポーツイベントの運営・実施やスポーツの指導に参画できる環境を整えることが期待される。

2017年度から2021年度にかけての第2期計画では、中長期的なスポーツ政策の基本方針として、

- (1)スポーツで「人生」が変わる！
- (2)スポーツで「社会」を変える！
- (3)スポーツで「世界」とつながる！
- (4)スポーツで「未来」を創る！

を掲げ、「スポーツ参画人口」を拡大し、「一億総スポーツ社会」の実現を目指している。

第2期「スポーツ基本計画」では、2021年度までにスポーツ目的の訪日外国人旅行者数を250万人程度、スポーツツーリズム関連消費額を3,800億円程度、地域スポーツコミッションの設置数を170に拡大するという目標が掲げられ、各種の事業が進められている。2019年度時点ではスポーツ目的の外国人旅行者数は約195万人（2018）、スポーツツーリズム関連消費は約2,892億円（2018）、地域スポーツコミッションの設置数は118団体（2019）となっており、スポーツボランティアにおいては、活動場所や機会の創出につながっているといえる。グローバル、ローカル共にスポーツに関わる人が増えている現在は、これまで以上に「スポーツをささえる人」が求められているといえる。

5 障害者スポーツにおけるスポーツボランティア

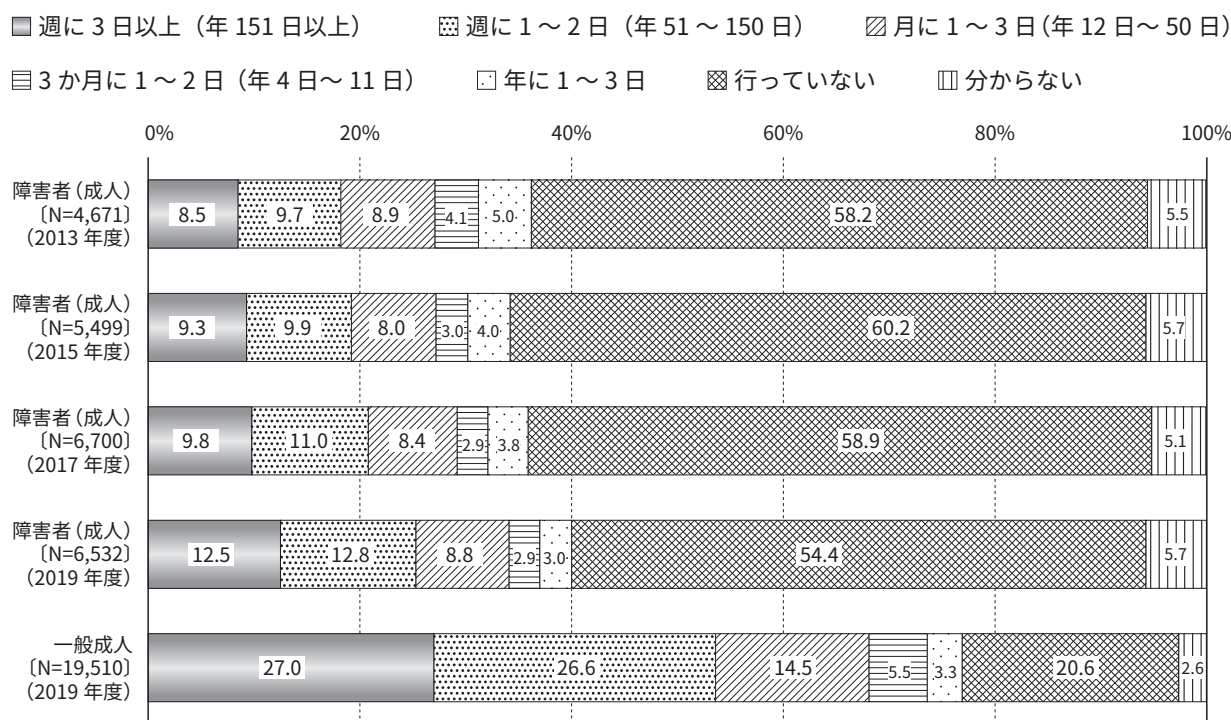
5-1 障害者のスポーツ実施状況

過去1年間に行ったスポーツ・レクリエーションの日数を下に示した。上段が成人の障害者、下段が一般成人のものである。

週3日以上は障害者（成人）12.5%に対して一般成人27.0%、週1～2日では障害者（成人）12.8%に対して一般成人26.6%となり、定期的な水準となる週1日以上のは障害者25.3%に対して、一般成人53.6%と半分の水準にとどまる。より顕著な違いは、行っていない者の割合が障害者（成人）54.4%に対して一般成人20.6%となり、2倍以上である。

過去の合計値と比較すると、2013年度の18.2%から2019年度には25.3%と、障害者（成人）のスポーツ・レクリエーション実施者は増加した。

障害者はスポーツ・レクリエーションの実施により、健康増進以外にも、他者とのコミュニケーションの機会創出や自信の獲得など、様々な効果を期待できる。その半面、一人では活動が困難な場合もあるため、スポーツボランティアが貢献できる余地は大きいといえる。



【図7】過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数（成人）

※「一般成人」は、スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（2019年度）より作成

資料：「スポーツ白書」2020

5-2 障害者差別解消法

「4-4 スポーツ基本法」で、スポーツ基本法の基本理念に「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と、障害者スポーツの推進が定められていることを紹介した。また2016年には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(障害者差別解消法)が施行され、スポーツ庁が「スポーツ庁における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応要領」を同年から実施する等、障害者がスポーツを行う権利が明確に守られている。

スポーツボランティア・リーダーはこれらのことを念頭に置き、障害者がスポーツを楽しめるように十分に配慮しなければならない。加えて、障害者がボランティアとして参加する活動の場でも、分け隔てなくボランティア活動を楽しめるように配慮することが求められていることも、十分に認識しなければならない。



6 スポーツの価値を高める存在としてのボランティア活動

6-1 求められるスポーツボランティアの力

スポーツ基本計画やスポーツ庁の設置によって人々がスポーツに触れる機会が増えることが期待されているが、スポーツボランティア実施率は横ばいの傾向が続いている。ただ、スポーツボランティアの実施希望率は一定の水準を保っており、特にスポーツ愛好家がスポーツボランティアに新規参加する可能性をうかがえる。

活動場所としては、地域スポーツコミッションの活動や、スポーツ実施率の向上が期待される障害者スポーツにおいて、スポーツボランティアのニーズが高まっている。それらの領域においてスポーツは単なる余暇としてだけではなく、地域の活性や障害者のクオリティ・オブ・ライフ（生活の質）に寄与するものである。そして、スポーツボランティアはその効果をさらに向上させ、スポーツの価値を高める存在であるといえる。

スポーツボランティア・リーダーは、メンバーを団結させ、活動を成功に導くことが期待される。それに加え、スポーツボランティア活動が持つこれらの働きを他の者に伝えることで、スポーツボランティアの発展、さらにはスポーツの価値を高める役割を担っている。

6-2 多様化するスポーツボランティアの可能性

近年、スポーツボランティア活動は、対象スポーツの種類や実施形態が多様化し、多岐にわたっている。例えば、応急処置や怪我予防、疲労回復に関わる活動等、専門知識を要するボランティア（専門ボランティア）としては、「AEDモバイル隊」「スポーツマッサージ」「スポーツ・アロマ」などの活動が挙げられる。また、水上でのスポーツにおいては、「ライフセーバー」としての活動や、カヤックやボートを利用した活動が求められる。


このように、各スポーツイベント等の特性・特徴によって、スポーツボランティアの活動環境は大きく異なる。スポーツボランティア・リーダーは、必要となる活動内容を取りまとめ、各メンバーが得意とする活動などを把握して連携させることで、はじめてイベントを成功させることができる。また、各スポーツイベントの主催者や活動団体との理解を深め、それぞれの経験を共有し、その後の活動に活用・応用することで、スポーツの価値を高めることができる可能性を秘めている。

スポーツボランティア・リーダーに必要なスキル

7 コミュニケーションで意識すべきこと

7-1 コミュニケーションの目的

コミュニケーションの目的は、「人を動かすこと」にある。単に、自分が言いたい言葉を相手に伝えただけでは不十分であり、それが具体的な行動につながらなければ、コミュニケーションの目的を果たしたとは言えない。コミュニケーションの目的を踏まえた上で、意識すべきプロセスは以下の5段階がある。

- 
- ①理解：論理的に主題と整合性のある説明をする
 - ②納得：反対意見に対する反証を踏まえて、妥協点を見出す
 - ③共感：論理面だけではなく、感情面でも同じ価値基準を持つことを明確にする
 - ④同意：意思表示に対する賛同を得る
 - ⑤行動：目的を達成するために自ら動いてもらう

会社等の組織とは異なり、上下関係のないスポーツボランティア・リーダーとメンバーの間柄において「人を動かす」ためには、一方的な命令では成立しない。ボランティアという対等な立場にあることを忘れずに、批判したり、非難したりして、プライドを傷つけないように配慮が必要である。そして、お互いに納得できる結論を導き出し、メンバーに自主的に行動してもらうように導くコミュニケーションスキルが求められる。

例えば、相手に何かをしてほしいときに、「××してください」と言うよりも、「どうしたら××を実現できると思いますか？」という問いかけをすることで、相手が自主的に考えた上で行動に移してもらえる。コミュニケーションスキルに関するデール・カーネギーの名著、『人を動かす』に書かれている以下の要点が参考になる。

1. 相手を名前と呼ぶ

名前は最も快い、大切な響きを持つ言葉である

2. 聞き手に回る

相手に興味を持たせるためには、まずこちらが興味を持つ

3. 命令せず意見を求める

どうしたらよいか？ という投げかけで、相手に思いつかせる

4. 批判も非難もしない

相手をやっつけるよりも、相手に好かれる方が、よほど愉快である

5. 笑顔で接する

与えても減らず、与えられた者は豊かになる

「人を動かす」(デール・カーネギー著・山口博訳)

7-2 アイスブレイク

アイスブレイクとは、コミュニケーションの場において温かいムードをつくり、冷え切った雰囲気や和らげることをいう。ボランティア活動の場においてスポーツボランティア・リーダーが大切にすべきこと、意識することは、「率先する」「見本を見せる」ことである。

先頭に立ったり、最初にやったりすることも重要ではあるが、それ以上に「笑顔」と「あいさつ」の見本を見せ、率先した雰囲気作りをすることを、スポーツボランティア・リーダーとして大切にしなければならない。

笑顔やあいさつの大切さを言葉で説いてメンバーに実践させるよりも、まず自らが実践し、相手も自然に笑顔やあいさつを行うように促す工夫が必要である。

7-3 ハーディング効果

ハーディング効果とは、周囲の人々と同じ選択をすることで安心感を得たい心理のことをいう。例えば、メンバーの4割が活動に対して「楽しい」とポジティブに感じていても、他の6割がネガティブに感じていると、ポジティブに感じていた人も、ハーディング効果によってネガティブな印象を持つようになってしまう。

スポーツボランティア・リーダーは個人に目を配るだけでなく、チーム全体が意欲的に活動を行っているかどうかを考えなければならない。

7-4 スポットライト

スポットライトとは、チーム内の「ある態度のメンバー」に光をあてることで、実態よりもポジティブな人が多い、ネガティブな人が多いと感じさせて、チームの雰囲気をコントロールする方法である。

一例として、活動が多忙でメンバーに疲れが見えてきたときに、積極的に役割をこなしている人を褒めるなどすることで、他のメンバーの活動意欲が回復する効果が期待できる。

7-5 インフルエンサー

インフルエンサーとは、チーム内で特に影響力の強いメンバーに個別に働きかけることで、チーム内の雰囲気をコントロールする方法である。スポーツボランティア・リーダーはチーム内の人間関係にも注意を払い、特に発言力の強いメンバーとチームの目標やビジョン等を共有することで、さらに団結力を向上させることができる。

8 リスクマネジメントスキル

8-1 リスクとは

ボランティア活動において、リスク (risk) は様々な形で存在する。リスクとは一般的に、「ある行動に伴って (あるいは行動しないことによって)、危険に遭う可能性や損をする可能性」などと定義される。ハザード (hazard) と同じように「危険性」と訳すこともあるが、ハザードは潜在的に危険の原因となりうるものを指し、リスクは実際にそれが起こり、現実の危険となる可能性を含めた概念といえる。ハザードがあるとしてもまず起こりえない場合、リスクが低いといえる。一方、確率は低いが起こった場合の被害が甚大であれば、リスクは高くなる。

8-2 スポーツボランティアにおけるリスク

スポーツボランティアにおけるリスクには、事件・事故・自然災害などがある。ここで言う事件とは犯罪の嫌疑がある事実であり、事故とは犯罪の嫌疑のない事実のことである。階段から人が落ちたという事象を例に挙げると、他人に押された結果として落ちた場合は事件であり、自分で転んだためであれば事故ということになる。

次に、直接的関与と間接的関与について説明する。

直接的関与は、その場で、直接の影響を受けるもののことであり、先述の事件・事故・自然災害が該当する。例えば、古くは1972年9月5日ミュンヘンオリンピックにおいて、人質9名全員と警察官1名がテロリストグループによって殺害される事件があった。最近では、2013年4月15日ボストンマラソンにおいて爆破事件が起きた。自然災害等には台風や地震、洪水などがある。いずれの場合にも、有事の際を想定して会場となる近隣の避難場所を確認しておくこと、また屋内であれば、非常階段や非常口などの場所を確認しておくことが大切である。さらに、これらの情報は事前説明会等で会場図面を用いて伝え、関係者間での共通理解としておく必要がある。

また、近年では、天気予報をはじめ、詳細な予想ができる情報が増えてきた。事業の開催前に開催基準を定めておけば、天候が悪化した場合にもこういった情報をうまく活用して開催可否を判断することができる。これもリスク対応のひとつといえる。

一方、間接的関与とは、例えばテロを受けた翌年のボストンマラソンの参加申込数、あるいは他の地域で開催されるマラソン大会への参加申込数やボストンで開催されるマラソン以外のスポーツイベントへの参加申込数の減少など、間接的な影響を意味する。間接的とはいえ、その影響力は決して無視できるものではない。

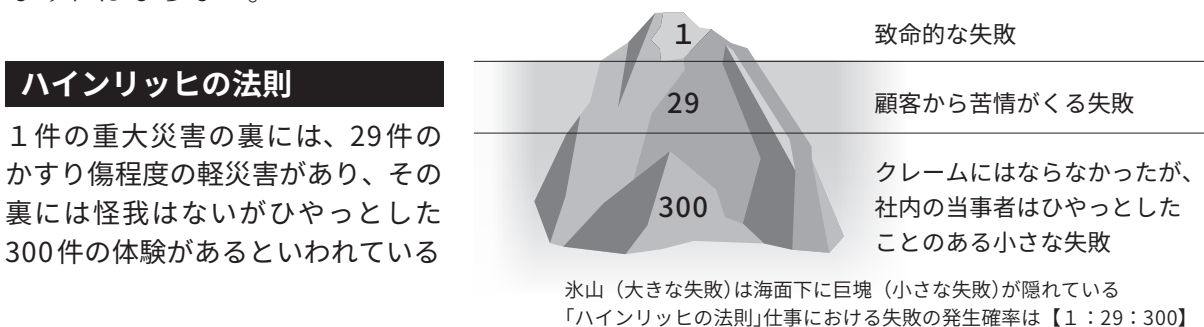
8-3 リスク回避・対応能力

スポーツボランティア・リーダーには、平時にはイベントにおける様々なリスクを予測する能力が、有事には生じた出来事への対応能力が求められる。

リスクマネジメントについての説明の際によく用いられるのが、ハインリッヒの法則である。ひとつの重大事故や災害の裏には、29件のかすり傷程度の小さな災害があり、またその裏には怪我はしないがひやとした300件の体験があるといわれ、ひとつの重大災害（事故）の裏には小さな事故や失敗が隠されていることを意味する。

ハインリッヒの法則は、下図のような冰山を用いても説明される。

小さな事故でも、積み重なると大きな事故に発展するので、情報共有をしっかりと行わなければならない。



ハインリッヒの法則

1件の重大災害の裏には、29件のかすり傷程度の軽災害があり、その裏には怪我はないがひやとした300件の体験があるといわれている

以下に、平時と有事の例を挙げる。

・平時

雨が降るというリスクを予知し、それにより発生する対応を考えておく必要がある。体育館内でのイベントであっても、事前の傘置き場の設置や濡れた体で会場入りする参加者への対応など、様々な事前準備が考えられる。この対応を怠ると、体育館内で滑って転倒・負傷する事故などが発生する可能性が高まる。

・有事

運動中に他者との接触や転倒によって負傷者が出たら、直ちに手当を行い、場合によってはAEDの処置や救急車の要請を行う必要がある。対応が遅れると命に関わる恐れもあるため、スポーツボランティア・リーダーは、考えられるリスクの種類とその対応法を事前に予測し、備えておくことが必要となる。

【参考】

1. 119番通報の方法について

119番通報をしたら、まずは「火事か救急か」、次に「どこで」、そして「何があったのか」、最後に「自分の名前と今かけている電話番号」が確認される。

外出先で場所を正確に伝えることは難しいが、自動販売機には住所を表示するステッカーが貼られているので探すと良い。また、携帯電話から119番に電話をかけた場合であっても地域の消防署につながるようになっているが、「電柱の番号」や「信号機の地名表示」「道路標識にある管理番号」を伝えると、より正確に現在地が特定できる。

2. AEDについて

AEDは、心臓がけいれんし血液を流すポンプ機能を失った状態にあるときに、電気ショックを与えて正常なリズムに戻すための医療機器であり、2004年7月から非医療従事者である一般市民も使用できるようになった。公共施設や大きなビルの入口には、ほぼ設置されている。中には飲料の自動販売機に設置されていることもある。

8-4 備えておきたい対応方法

応急対応とは、一般的に参加者やボランティア自身の負傷や急病などに対する応急処置や手当を指す。さらに、負傷以外の様々なトラブルにも対応しなくてはならない。なお、厳密に言えば、「応急処置」は救急隊員が行う行為とされるため、一般市民が行うものは「応急手当 (first aid)」と呼ばれる。

以下のような、突発的な事象が発生した場合、いずれも速やかに、かつ正確な対応が求められる。

①応急対応：市民ができる応急手当など

(例) 転んで腕を骨折・水分不足で倒れる・目にゴミが入る

②事故対応：物損などの対応

(例) 看板が風で倒れる・財布を落とした

③苦情対応：トラブルへの対応

(例) 荷物がなくなった・迷子

④その他：SNSなどへの対応

(例) 良くも悪くも、活動の感想・参加者の様子など (拡散する恐れがある)



8-5 応急手当を身に付けておくことの大切さ

リスク対処のために、スポーツボランティア・リーダーは応急手当を身に付けておくことが有用である。また、どの方法が最適なのかを判断する力も求められる。応急手当の内容・手法は時代と共に変わるため、一度身に付けたあとも、常に復習するとともに、最新の対応方法を把握しておくことが必要になる。以下に主な応急手当の講習を示す。

①日本赤十字社：救急法講習（5時間）

基礎講習では、手当の基本、人工呼吸や心臓マッサージの方法、AEDを用いた除細動等を習得する。救急員養成講習では、日常生活における事故防止、止血の仕方、包帯の使い方、骨折などの場合の固定、搬送、災害時の心得等についての知識と技術を習得する。

②普通救命講習：消防署関連にて実施（3時間）

心肺蘇生やAED、異物除去、止血法等を学ぶ。救命技能認定証が交付される。

8-6 保険について

リスクに備えて、イベント参加者やボランティアへの保険も数多くある。ボランティア活動中の事件・事故から身を守る上で、保険が果たす役割は大きい。スポーツボランティアに関わる保険には、以下のようなものがある。

【主に事業の主催者が加入するもの】

・賠償責任保険

参加者やスタッフなどに何らかの被害をかけた場合に適応される。自らが保険に加入し弁済するケースと、イベント等の主催者がボランティアのために加入しておくケースがある。

・傷害保険

ボランティア活動中等において、急激で偶然な外来の事故により被った傷害に対して、被害者のリスクを軽減する保険。ただし、保険支払いに対応するためには、各条件をクリアすることが必要となる。

【ボランティア個人が加入するもの】

・ボランティア活動保険

全国社会福祉協議会が取り扱い、ボランティア活動中、自身が怪我をした場合や、第三者の身体・財物に損害を与えた場合が対象となる。年間1,400円程度で加入できる。

8-7 具体的なリスク軽減

スポーツによりボランティアの活動内容は異なるが、リスク軽減のためにできることには共通するものもある。以下に例を挙げる。

①当日に備え、体調管理

特にスポーツイベントは、非日常の体験となるため、いつも以上に体力や精神力が疲労する。その前日に、長時間の移動やメンバーとの食事会等で睡眠時間が十分でない場合は、疲労した状態で当日を迎えることになる。共に活動するボランティアとの前日の集まりは楽しみのひとつではあるが、自身の体調管理を怠らずに活動に臨まなければならない。

②活動前に連絡系統を確認

いざ、困ったことが起こった時に、「誰に」「どうやって」聞けばよいのか分からない…とならないよう、活動前に連絡系統を確認しておくこと。

大規模スポーツイベントでは、ボランティアにタブレットを貸与し、不明点の確認を含む様々な大会本部とのやり取りを、オンラインでつながって連絡を取り合うケースもある。ただし、通常のスポーツイベントではまだここまで整備されていないため、チームとして円滑に機能するためにも、活動前に連絡系統を確認する必要がある。

③悪天候への対応

ボランティアの活動時間は、朝から夕方までの日中、夜間の活動、2日間連続など様々である。例えば冬季の屋外での活動によって体温が下がってしまうと、風呂やストーブ等を使わなければ下がった体温を戻すことは難しい。寒さ対策に限らず悪天候の場合も考え、予備の着替えを用意しておくことが望ましい。ただし荷物が増えすぎないように、効果的な衣類を選ぶと良い。昨今は体を温めてくれるものから、汗を気化させて冷えやすいものまで素材も多様である。また、直射日光を浴びる可能性がある活動では、帽子・長袖長ズボンは必須である。雨が予想される場合は、降ってからではなく、降り始める前に、防水ビニール袋へ荷物を入れておくと良い。濡れると困るものとして革製品や電子機器等はすぐ思い浮かべるだろうが、着替えやタオルも濡れると使えなくなるので注意したい。

④応急手当後、受診を勧める

イベント会場で行えるのは応急での手当てに限られるため、必ず医療機関での受診を勧めること。たとえ軽度な出血で止血できた場合であっても、「念のため、医療機関を受診してください」と伝えること。外観からはわからない、例えば骨や筋肉等を傷めている可能性やさらなる消毒が必要な傷であることも考えられる。

特に頭部の打撲や傷の場合には、見た目にはわからない内出血を起こし、悪くすると人命にかかわることもあるため、「必ず」受診するように勧めること。中には、痛めてから数時間後や一晩経過してから症状が出ることもある。

⑤トラブルには複数のスタッフで対応等

大きなトラブルであればあるほど、複数人対応が望ましい。また、小さなトラブルであっても時間とともに大きな問題に発展するケースもある。一人ではなく、複数で対応すれば、第一現場対応、第二現場対応、連絡役などの役割分担をすることが可能となる他、二重事故を防ぐことにもつながる。

Column I 国際イベントにおけるリスクマネジメント

特にスポーツイベントにおいて、参加者との接点が多いボランティアはさまざまなリスクに直面する。2019年に開催されたラグビーワールドカップ2019日本大会で大会組織委員会を務めたスポーツボランティア運営担当者は、リスクマネジメントとして下記のような対策の必要性を感じたという。

【連絡系統の確立】

通常の連絡系統とは異なる、有事に始動する連絡系統を事前に確認しておく柔軟に対応できる。緊急時には業務量が急激に増え、連絡網が1つしかない連絡がつかないケースがある。緊急時には、現場の状況に左右されずに判断できる人を予め把握しておくか、連絡が滞らない方法を整備する必要がある。

【スポーツボランティアが受ける質問への準備】

スポーツボランティアが受けるであろう質問について、事前にメンバーとともに対応策を考える機会を設けたい。そうすることで、多くの視点でさまざまな意見が上がり、メンバーの満足度向上にもつながる。質問の一例として、「駅から会場に移動したいが、脚が不自由なのでタクシーで会場に行けるか?」「イベント終了後に大混雑している状況で、どの交通手段ならば空いているのか?」などが考えられる。

実際に生じたリスクとしては、2019年10月12～13日に、台風19号が日本列島に接近したことが挙げられる。13日には注目度の高い日本対スコットランド（神奈川・横浜）が予定されており、開催の可否が注目を集めた。大会組織委員会は、台風の進路を考慮した上で、大会の数日前の時点で開催が濃厚だった会場のボランティアに対して、最終決定を迫って伝える旨を断った上で、現状では試合開催予定であることを通達した。

12日に開催予定だったニュージーランド対イタリア（愛知・豊田）とイングランド対フランス（神奈川・横浜）、13日に開催予定だったナミビア対カナダ（岩手・釜石）の中止が決定。それを受けて、決められた手順に則り、ボランティアに中止の連絡を行った。

岩手・釜石会場では、県外のボランティアが多数いたため、新幹線に乗車すると思われる時間の前などに、正式なオペレーションに先んじて連絡を行った（その後JR東日本の計画運休が発表された）。

13日の日本戦は、当日に開催が決定された。神奈川・横浜会場では、開催決定前にすでに数人のボランティアが自主的に集合しており、ほかのボランティア受け入れの準備を手伝ってもらった。コールセンターには「会場到着が遅れるけれども、ボランティアに参加してもいいか」という問合せが多くあり、「身の安全を確保した上で、可能ならば参加してほしい」と伝えた。

資料:日本スポーツボランティアネットワーク「ラグビーワールドカップ2019日本大会公式ボランティアプログラム『NO-SIDE』活動レポート」

日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)について

9 スポーツボランティア養成プログラムの概要

9-1 スポーツボランティア養成プログラム

名称	スポーツボランティア研修会	スポーツボランティア・リーダー養成研修会	スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会	スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会
内容	スポーツボランティア活動に必要な基礎知識	スポーツボランティア活動の実践知識	スポーツボランティア活動におけるチームビルディング	スポーツボランティア組織の運営および安全管理
時間	2～3時間	1日(5.5時間)	2日(11.5時間)	2日(12時間)
ライセンス	ライセンスなし(修了証の交付)	スポーツボランティア・リーダー	スポーツボランティア・上級リーダー	スポーツボランティア・コーディネーター
受講資格 (全てを満たす者)	○中学生以上	○15歳以上 ○スポーツボランティア活動の経験がある者 ○スポーツボランティア研修会を受講・修了している者 (但し、本会の正会員団体に所属するボランティアが受講する場合、正会員団体からの申請によりスポーツボランティア研修会の受講を免除することができる)	○18歳以上 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンスを有している者 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンス取得後1年以上を経過し、かつ10日以上スポーツボランティア活動経験がある者 ○普通救命講習またはそれに準ずる講習を受講し有効期限内のライセンスを有している者	○スポーツボランティア・上級リーダーのライセンスを有している者 ○正会員団体に所属するボランティアであり、正会員団体が適任と認め推薦する者
受講料	1,500円	3,000円	6,000円	6,000円
評価・判定	レポート	—	○	○
	受講態度	—	○	○
	面接	—	—	○
有効期限		取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限

9-2 更新講習

名称	—	ライセンス更新講習
内容	—	スポーツボランティアの現状と社会認識およびそれぞれのライセンスに求める新たなスキル
時間	—	2時間程度
受講料	—	2,000円

9-3 講師・指導者制度

名称	—	准講師	講師
認定手続き	—	「上級リーダー」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者	「コーディネーター」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者
有効期限	—	上級リーダー有効期間に準ずる	コーディネーター有効期間に準ずる

■執筆（50 音順）

東 正樹

宇佐美 彰朗

工藤 保子

澤内 隆

園部 さやか

竹澤 正剛

綱島 浩一

二宮 雅也

渡邊 浩美

スポーツボランティア研修会テキスト（2021 年 4 月版）

特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3F

TEL：03-6229-5620 FAX：03-6229-5621

URL：https://spovol.net E-mail：info@jsvn.or.jp

本テキストの内容を引用された場合、本書の引用であることを明記してください。

